満　天　の　星 (※1)

高普第 12 回卒　渡 部　克 巳 (※2)

神武景気を経て高度経済成長期に入らんとしている昭和 32 年、新築落成した我母校は、急速に発展する時代を象徴するかの如く、正に白亜の殿堂ともいうべきものであった。幸運にも入学を許可された我々は、この素晴らしい環境と多士済々の先生方に恵まれ大いに意気が揚がった。事実当時は実にユニークで勝れた先生方が教鞭を執られていた。

「勝つぁん」と呼ばれ、ステテコ姿で世間話をするような打解けた授業を展開する化学の阿部勝郎 (※3) 先生、「ヤギ」と呼ばれるようにいつも柔和で知性溢れる英語の寺島広志 (※4) 先生、「跳んで開いて、軽やかに！」という独特の号令が今も耳に残る保健体育の小泉義康 (※5) 先生、真面目そのものだがどっこい芸達者な社会の松岡重信 (※6) 先生、いつもクールな目で自然の摂理を説く生物の田辺博 (※7) 先生、更に社会の斎藤馨 (※8) 先生の授業では口角泡を飛ばす熱弁の余り、最前列のH君の顔はいつも唾まみれであったのを覚えている。こうした一騎当千の先生方の薫陶を受けた甲斐あって、曲がりなりにも医学の道に進んだ小生は、つい最近他界された小泉義康先生をはじめとして微力ながら高恩に報い得るしあわせに浴している。

当時田舎では高校進学率も低く「ああ上野駅」という流行歌の中身通りの時代で、中卒で都会へ就職する者も可成の数に上った。高校に進学してもK君などは毎日夜遅く迄薪炭配達のアルバイトで家計を支え、教室では居眠りばかりしていたのに成績は優秀で二宮金次郎の銅像ばりの人であった。大学進学は当時既に四当五落などといわれ高度経済成長と共に受験戦争も激化しつつあったが、田舎育ちの我々は実にノンビリしたもので、お蔭で大いに辛酸を嘗めさせられたのを覚えている。血気盛んなものはミニ学園紛争よろしく授業を中断し、いささか身勝手な要求や自治権なるものを主張して先生を困らせた一コマも今は楽しい思い出となっている。

クラブ活動は特に卓球、バレー、サッカー、野球等で大いに相高健児の意気を示した。時の応援団は如何にも強面の猛者が揃い、入学早々屋上に駆り出され応援の練習をさせられた。要領を得ない小生は早速その餌食になり、全員の前で一人校歌を歌わせられ肝を冷やしたことがあるが、今思い浮かべると何故か笑いがこみあげてくる。

その当時の職員で後に相馬民謡の大家となられた若き日の阿部市郎 (※9) さんに、放課後の教室で夜の更ける迄相馬民謡の手解きをしていただいたことがある。その阿部さんも今年他界され晩年吹き込まれたテープを聴く度に、一際美しいあの満天の星がしみじみと偲ばれる昨今である。

こうして様々な形で切磋琢磨して過ごした３年間は意識するとせざるとに拘わらず、あの満天の星のように夫々が独自の輝きを放ち限りなく無限に近い可能性に満ちていた時期であったように思われる。

（※１）「相中相高百年史」1998（平成10）年７月６日発行より。

（※２） 昭和35（1960）年卒、飯豊出身。

（※３） 昭和16（1941）年～昭和20（1945）年、相馬中学教諭。昭和25（1950）年～昭和54（1979）年、相高教諭。

（※４） 中30回、昭和７（1932）年卒。新地出身。昭和31（1956）年～昭和41（1966）年、相高教諭。

（※５） 中40回、昭和17（1942）年卒。中村出身。昭和23（1948）年～昭和48（1973）年、相高教諭。

（※６） 中38回、昭和15（1940）年卒。中村出身。昭和25（1950）年～昭和42（1967）年、相高教諭。

（※７） 昭和32（1957）年～昭和48（1973）年、相高教諭。

（※８） 中20回、大正11（1922）年卒。中村出身。昭和25（1950）年～昭和39（1964）年、相高教諭。

（※９） 昭和34（1959）年～昭和52（1977）年、相高用務員。

（ 転記&※脚注　村山 ）